

# はつたん 八反遺跡第2次発掘調査説明資料

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 平成24年10月27日

## 調査要項

遺跡名(番号) 八反遺跡(県番号No.723)  
所在地 山形県東根市大字長瀬字八反  
時代・種別 縄文時代～中世前期・集落跡  
中世後期・墓地跡  
起因事業 東北中央道(東根～尾花沢間)  
調査依頼者 国土交通省山形河川国道事務所  
調査機関 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター  
現地調査 平成24年5月14日から12月20日まで  
調査面積 8,550㎡  
調査担当者 主任調査研究員 高桑登(現場責任者) 高橋敏  
調査研究員 小笠原伊之 長谷部寛 江波大  
調査員 高柳俊輔 板橋龍

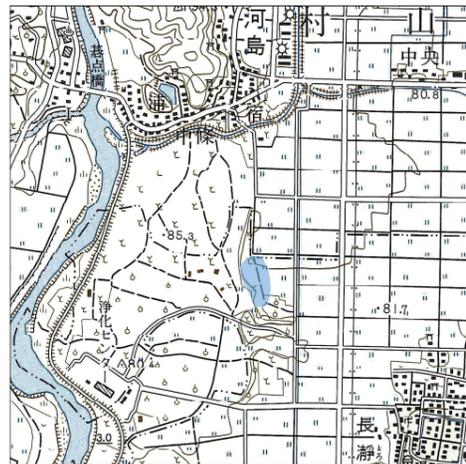


図1 遺跡位置図(1/50,000)

## 調査成果(10月27日現在)

検出遺構 縄文時代：土坑 石器集中部  
古墳時代：土坑 竪穴建物  
奈良・平安時代：竪穴建物 土坑 河川  
中世：集石遺構 土坑 柱穴 溝 河川  
出土遺物 縄文時代：縄文土器 石器  
古墳時代：土師器 須恵器 子持須恵器 勾玉  
奈良・平安時代：土師器 須恵器  
中世：中世陶磁器 漆器 古銭 板碑

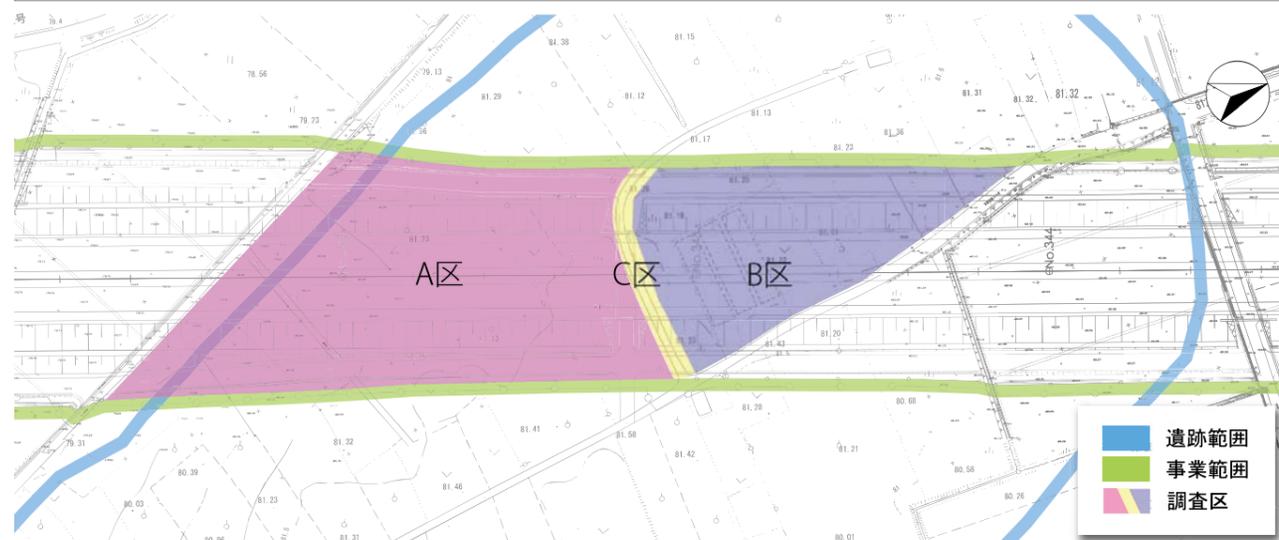


図2 調査区概要図(1/2,000)

## 1 調査の概要

八反遺跡は最上川右岸の自然堤防上に位置しています。現在は果樹園や畑が広がり、周辺の水田より一段高くなっています。遺跡の周辺には、最上川の旧河道の痕跡が低地や水田として残されており、一帯が最上川の氾濫原だったことがわかります。

八反遺跡は長い期間存続した遺跡で、時代ごとに層をなして遺構や遺物が見つかりません。第1面は中世後期、第2面は古墳時代～中世前期、第3面は縄文時代の遺構や遺物(写真6)が見つかりました。

昨年度はA区1面、今年度はA区2・3面、B区1面(B区2面は遺構検出のみ実施)の調査を実施しました。

## 2 見つかった遺構と遺物

昨年度の調査で、A区1面は中世後期の墓地であったことがわかっています(図3)。今回、B区1面でも石を集めた遺構や、板碑(中世の供養塔)を捨てた土坑(写真9)などが見つかり、A区の北側にも墓地が広がることが確認されました。またB区の中央部からは、土を固く叩き締めながら盛り上げた遺構が見つかりました(写真8)。八反遺跡の地名の由来とされる「八つの壇」の一つの可能性もあります。

A区2面では北半部に中世前期の遺構、南半分に古墳～平安時代の遺構が集中していません(図4)。中世の遺構では調査区を縦横に走る大規模な溝が特徴的です(写真3)。溝は幅約2m、深さ1m以上で、北側では直角に曲がる様子も確認できました。直角に曲がった溝の内側には多数の柱穴や井戸が見つかり、溝に囲まれた屋敷地の存在が想定できます。溝や井戸からは中世前期の遺物が出土しています。

調査区の南端部には最上川の支流と考えられる川の跡が見つかりました。川に沿ってやや高い場所には古墳時代から平安時代の遺構が多く分布しています。特に川に近い場所には多くの竪穴建物が重なっており、同じ場所で何度も建て替えをしていたことがわかりました。竪穴建物は奈良時代のものが多く、古墳時代の遺構は、遺物が多く出土するものの、明確ではありません。

写真1は古墳時代の子持須恵器です。平安時代の竪穴建物から出土しました。通常は古墳の副葬品として出土することが多く、集落からの出土は稀です。東北地方でも数例しか出土例がなく、貴重な発見です。

## 3 まとめ

中世後期の墓地が見つかった第1面は、その大半が洪水による堆積と考えられる礫層で覆われていました。最上川の氾濫と戦い、また川の恵みを受けながら、長い期間この場所に暮らしてきた人々の生活の様子が、今回の発掘調査によって明らかになってきました。



写真1 ST1180 出土子持須恵器(原寸大)



写真2 SD3084 出土中世陶磁器

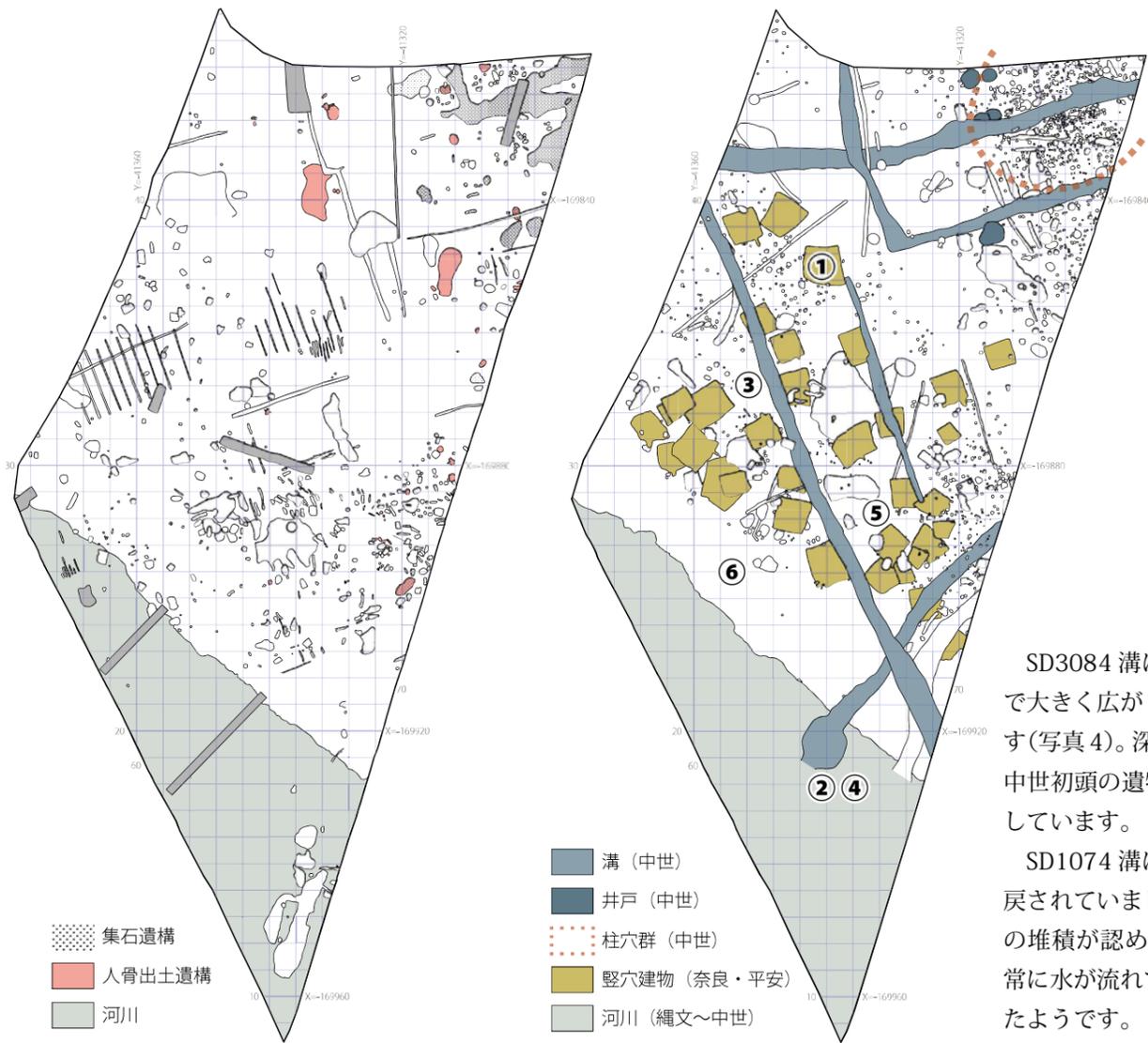


図3 A区1面遺構配置図 (1/1,000)

図4 A区2面遺構配置図 (1/1,000)

SD3084 溝は川跡との接続部分で大きく広がり、急に深くなります(写真4)。深い部分の底からは、中世初頭の遺物(写真2)が出土しています。

SD1074 溝は大半が一度に埋め戻されていました。流水による砂の堆積が認められないことから、常に水が流れていた溝ではなかったようです。



写真3 SD1074 溝の堆積の様子



写真4 SD3084 溝と川跡の接続部分



写真5 ST3301 竪穴建物 (平安時代)



写真6 A区3面石器集中部 (縄文時代)



写真7 B区1面完掘状況 (上が北)

盛り土状の遺構(写真8)はB区1面の調査中に見つかりましたが、掘り下げてみるとB区2面上に作られた遺構であることがわかりました。約20×10mの範囲に盛り土が認められ、北側にだけ直線的な石列が伴っています。

古瀬戸壺(写真10)はB区2面の遺構から出土しました。表面に牡丹の花が描かれています。



写真8 盛り土に伴う石列 (中世)



写真10 古瀬戸壺 (14世紀)



写真9 板碑が捨てられた土坑 (中世)

※図・写真中の赤丸数字は写真番号と対応しています。遺構の場所、遺物の出土地点を示しています。